

フスト・マイスターとカスパー・ラードハイマー
—15世紀マインツとハイデルベルクにおける装飾本研究再考—

池田 真弓 (慶應義塾大学)

本発表の狙いは、15世紀後半のマインツとハイデルベルクにおける装飾本制作がどのように関連していたのか、長年の謎であるこの問題の一端を、フスト・マイスターと呼ばれる装飾画家の足跡を辿ることから明らかにすることにある。

当時、ヨーロッパにおける活版印刷術発祥の地であり、司教座聖堂の街でもあったマインツと、プファルツ選帝侯の本拠地にして神聖ローマ帝国内で3番目に古い大学を有するハイデルベルクの間では、距離的な近さも手伝い、人的・物的交流が盛んであった。それを反映してか、両都市に所縁のある写本や印刷本の中には、相互に装飾様式が類似する作品群があり、一体どちらの都市で装飾されたのか、議論は決着を見ていない。その議論の出発点ともいえるのが、1936年にハンス・ロットが刊行し、その存在が知られることとなった1465年4月20日付の文書である。プファルツ選帝侯フリードリヒ1世が発布した通行手形とも呼ぶべきこの文書には、ハイデルベルク市民カスパー・ラードハイマーが、マインツの顧客に依頼されて装飾した本をマインツに送り届ける旨が記されている。この史料から、ハイデルベルクの装飾画家がマインツにまで顧客層を広げて盛んに活動していたという見解が出された一方、マインツで活動していた装飾画家の工房がそのままハイデルベルクに移住したとの解釈も提出された。本発表では、双方の論とも異なり、一人の装飾画家の移動を仮定することで、マインツとハイデルベルクの装飾の関連性の一端を説明する。

15世紀後半のマインツに、フスト・マイスターとして知られる装飾画家が活動していた。作品に一切署名を残していないが、綿密な様式分析に基づき発表者が彼の手に帰した作品を精査した結果、以下のような足跡が浮かび上がってくる。すなわち同画家は、1460年代初めにマインツからハイデルベルクに移住し、ほどなくハイデルベルク大学所属の装飾画家となって大学関係者の写本の装飾を手掛けたこと、プファルツ選帝侯の宮廷からも仕事の依頼を受け、同市の写本装飾における中心的な役割を担うに至ったこと、また、同地に移住した後も古巣マインツに戻って何点か仕事を請け負っていたことである。さらに発表者は、フスト・マイスターのこのような活動や、当時のハイデルベルクでの他の装飾画家の活動状況等を踏まえ、彼こそが上述の通行手形に記されたカスパー・ラードハイマーであったと推測する。

これまで注目されてこなかったフスト・マイスターのハイデルベルクでの活動の再構築を行う発表者の試みは、現物も関連史料も乏しく困難を極める15世紀後半のマインツとハイデルベルクの装飾本研究を進展させていく上で、今後の重要な足がかりの一つになるものと考えられる。